

私を包んでくれる風景

八年間通い続けたこの道を曲がった先に、今日も私を包んでくれる風景が、いつもと同じように私を待っている。毎日見ているこの風景が、私は大好きです。

福岡教育大学附属福岡小中学校の、少しくたびれた校門の後ろに、重なるように続く荒津の森。校門を入って直ぐ左には、藤の老木が見事な潮を作り、右には、銀杏の大木と、私達が愛着を込めて「亀池」と呼ぶ噴水池が続く。さらに校門から真つ直ぐに続く道のその突き当たりには、どつしりと腰を下ろしている荒津の森は、私達の学校の歴史を見守りつづけて来たのです。

小学校低学年の頃、風の強い日にこの森を見上げながら校舎へと走って行った記憶がある。風の日には、木々の梢がざわざわと音をたて、その音に包まれると、どこか違う場所へ吸い込まれて行くように感じたものです。雪の日には、クリスマスでもないので、大きなツリーに出会ったように、雪化粧された森は、幻想的で、子ども心に美しいと感じたものです。小学校の卒業式の日に、泣いてしまった事も、中学生になって、真新しいセーラー服に胸がわくわくしていた事も、部活動や体育祭で汗を流した事も全て、荒津の森に見守られて来ました。

あつという間に八年が過ぎ、気がつくや卒業まで数ヶ月となり、高校受験を控えて、この風景を見ながら通う毎日、今までの八年間の中では感じられなかったくらいにスピードのある数ヶ月になるような気がします。

通いながら通学路の、その先の角を曲がると、今日も、少しくたびれた校門の後ろには、私達を見守り、包み込んでくれる荒津の森がどつしりと腰を下ろして迎えてくれます。大好きなこの風景に包まれて、卒業までの日々を、大切にすごしていきたいと思えます。

「上人橋通り」って呼ぼうよ

私は十五年来、今泉にある「カバガバハイ」というヘアサロンでオーナーのトモさんに髪をカットしてもらっている。

私の髪は硬くてくせがあつて、変なところにつむじがあるの、とても扱いにくい髪なのに、トモさんはエレガントにカットしてくれる。そして、カットの技術だけでなく、トモさんの人柄にもひかれ、一ヶ月半に一回は今泉を歩く。だから、最近の今泉の様変わりには、驚くばかりである。いつの間にかやらとつても素敵をファッションビルが建つていたり、おしゃれな男の子とすれちがったりする。そして、今泉の通りをサウスストリートと呼ぶ向きもあるらしいということも知った。

歴史や伝統、英語で言うなら、トラディション。私はそういったものを大切にしなければならぬと思つている。では旧態依然の伝統をかたくなに守り続けるべきと思つているかという、それはそうではない。若者の新しい発想、感性、センス、創造力等を素晴らしいものだと思つている。

ところで、今泉の通り（今は警固）に、香正寺という日蓮宗のお寺がある。

江戸時代初期、若年二十六才という若さで、日蓮宗のトップに座られた、日延上人という方がおられたのだが、徳川三代將軍家光の命によって、九州へ流された。当時四十四才であった。彼は、黒田家二代藩主黒田忠之公のよき相談相手となり、現在の警固の地に九千坪の土地を与えられ、建立されたお寺が香正寺なのである。そして、当時の警固は香正寺を中心として街並が形成され発展していった。

また、現在の国体道路は川であった。飛び石というものはあつたが、渡りにくい。黒田忠之公は日延上人警固のために橋をかけた。それが「上人橋」である。

「上人橋」なんて呼ぶよ、みんな。

講評:警固・今泉の街の歴史と現代(いま)を、軽妙でリズムミカルな文章で、最後まで一気に読ませてくれる。得てして軽んじがれがちな、歴史を踏まえたまちづくりの大切さを提起している作品である。
(審査委員 鹿野 至)



松井 桜子
福岡県宗像郡福岡町



講評:可視像として網膜に映る風景をどのように感じるかは、まさにその人の感性です。自然の変化を身の回りの出来事と共に感性に捉えているこのエッセーは、前向きで感性の高い、心やさしい作品です。心に焼き付けられた荒津の森は作者の人生をこれからも支えていくことでしょう。
(審査委員 岡本 均)

伊瀬知 ひとみ
福岡市城南区

